
三人一緒に幻想入り外伝 Kの一日

澄田 康美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三人一緒に幻想入り外伝 Kの一日

【Nコード】

N9776N

【作者名】

澄田 康美

【あらすじ】

あらすじ

三人一緒に幻想入りに登場した謎の人物、K。この話はそんな謎に包まれた彼の謎に迫る・・・訳でもなく、妹紅や慧音と楽しそうにしている姿を描いた短編です。まあ暇つぶし程度にどうぞ。

(前書き)

作者の一言

こんにちわみなさん、澄田です (^| ^)

三人一緒に幻想入りでちょいと出てきたKっておっさんを覚えていますか？

え？覚えてない？思い出してくださいm()m

これはそんな謎の多いKの事を書いて見た話です。

「またオリキャラかい・・・なぜ東方だけで話作ろうとしないんだ？」とか思わないでくださいね。

澄田はこういうのが一番書きやすいんですよ。

まあついていけないと判断したら視界から消すなり何なりしてください。ではどうぞ。

朝も早い人里。

そこに住んでいるKは、今日も変わらない調子で朝を迎えていた。

「うーん、今日はいいい天気だ。この分なら雨の心配はなさそうだ。久しぶりに町の散歩でもしてみるのもありか。最近外からやってきた奴の面倒とかでろくに息抜きできなかったし。」

体を伸ばし、リラックスをしていると、通りかかった妹紅がKに話しかけてきた。

「お前の場合、普段から抜きすぎじゃないか？」

「おお！？いつの間にかいたんだお前さん！？」

突然の事に、動揺するK。

そんな様子を気遣う事もなく、妹紅が返してきた。

「ついさっきさ。それより、少しは空気入れておけよ。」

呆れた様子で言ったのに対しKは

「うるせえ！！俺の奴はすぐに膨らむから問題ないんだ！！」

と逆切れ気味に返した。

「それだけ中身が無い訳か。」

「やかましい！ほっとけ！」

痛い所を突かれまくり、ふてくされるK。

そんな様子のKに、妹紅は話を変えようと、こんな事を言ってきた。

「まあそれは置いてだ、これから散歩するんだってな？」

「そうしようと思ったけどやめだ！！誰かさんのせいで気分がのらねえよ！！」

まるで子供のようにすねるKに妹紅は、

「おいおい、そう気を落とすなって。あたしも暇してたから、付き合ってやるよ。」

恐らく親切心からの一言だろうが、そんな事は今のKが承知する訳がない。

K「け！！誰がお前みたいなずん胴女と・・・」

不機嫌な様子の一言を飛ばした。

しかし、それが妹紅の逆鱗に触れたようだ。

妹紅「・・・何か、言ったか？」

今にもKを殺しそうなオーラを出す妹紅にKは、

K「スイマセンゴメンナサイ・・・ゴイツシヨサセテイダキマス・・・」

ただただ萎縮し、従う他になかった。

妹紅「わかればいいよ。じゃあ、とりあえず慧音の寺子屋まで行ってみるか。」

さっきまでのオーラを消し、二人はその場を歩き出していった。

中年少女移動中……

町の通り。

朝も早くから活気のいい町並みは、見ていて退屈しないとんでも過言ではないだろう。

そんな町並みを眺めながらKは、

「それにしても、十年前から変わらないねえ、この町並みも。」

と懐かしむ様子を見せた。

妹紅もまた、

「そうだな。それより前はあたしもあまり知らないし。」

と同じ調子で答えた。

「十年前か……そう言えば、お前さんと会ったのって、確かこの辺りじゃなかったか？」

二人がいたのは、丁度町の自警団の本部近くであった為、Kがその

時の事を思い出したのだ。

「ああ、そう言えばそうだな。あの時は、あたしが慧音に悪い事言ったな。確か、それをお前が変に怒ったんだっけな？」

「そうだ、それでお前さんとマジ喧嘩になったんだ。よく考えたらとんでもない状況だよな。初対面でいきなり喧嘩するなんてよ。あの頃は俺も若かったからなあ。」

「で、今は立派な中年おっさんになったと。」

「・・・たく、一言多いぜ。でも若いっていいよなあ・・・」

「不老のあたしには、関係ない話だ。」

その一言に、Kが妹紅にふと疑問に思った事を尋ねた。

「あ、今更なんだがお前さんってどんだけ生きてるんだ？」

そうKが言つと、さっきまでは気楽な調子であった妹紅が、急に気を落とした様子を見せた。

「・・・その事はもう考えたくない。」

その様子から、どうやら妹紅はそういった話を好まないようだ。Kもさすがにそれを察したらしく、

「そうか。悪い事聞いたか？」

と一応気を利かせた一言を言った。

「・・・別に。」

Kの心遣いを察したのか、さっきと同じ調子に戻った。

そここうしている内に、二人の前に、慧音と生徒達のいる寺子屋が見えてきた。

「お、やっと見えてきた。あれもまったく変わらないねえ。」

「昔からああなんだ。十年やそこらで変わらないだろ。」

「そんじゃ、慧音は元気にしてるか、見に行くか。」

「あたしは普段から一緒にいるから、実はそんなに気にしてないがな。」

「お前から誘つといて、それはないだろ？それでも、学校じゃどうしてるかはわからんだろ？だから、見てて損はないだろ？」

「まあ。そうだな。」

「よし、そんじゃ迷惑かけない程度にお邪魔するか。」

とそのまま二人は、寺子屋の中へと入っていった。

慧音はいつものように、生徒達に勉強を教えていた。

「つまりこの式に使うのは……」

と言いかけたその時、ドアを開けて、Kが慧音の教室に入ってきた。

「おいっす慧音。調子はどうだ？」

とKが慧音に一声かけた。

「な、なぜお前がここにいるんだ!？」

突然の事に、慧音は戸惑わずにはいられなかった。

「ただの暇つぶしだよ。ついでに妹紅もいるぜ。」

と言っている通り、妹紅がKの後ろから覗くように慧音を見ていた。

「妹紅までいるのか？まったく、今は授業中だぞ……」

呆れた様子の慧音にKは、

「大丈夫だつて。多分邪魔しねえからさ。」

と悪びれる様子もない。

そんなやり取りをしていると、教室にいる生徒の一人が、慧音に尋ねてきた。

「ねえ慧音先生、その人だあれ？」

と言いながら、Kを指差した。

「ただの知り合いだよ。」

と慧音は答えた。

「おう、みんなちゃんと勉強してるか？勉強しないとおじさんみたいになるぜ？」

Kの冗談交じりの言葉に、教室にいる生徒達が無邪気に笑った。

「はははは。」

楽しそうな様子ではあるが、授業としてはこの有様はどう見てもま
ずかった。

さすがに慧音がKに怒りの混じった言葉をぶつけた。

「おいK！！邪魔はしないはずだろ！！？」

「おいおい、俺はただ真実を言ったただけだろ？反面教師も世の中
は必要だぜ？」

とまったく悪びれない様子に慧音は、

「とにかく！教室の後ろでもいいから見学だけにしてくれ！」

今日一番の怒号で、Kをしかりつけた。

さすがにやんちゃの過ぎたKは、慧音のいる教室の後ろで、まるで保護者のようにおとなしくさせられてしまった。妹紅も一応Kの隣で、教室の様子を眺めていた。

「まいったねえ。あんなに怒るなんて思わなかったぜ。」

「調子に乗りすぎたんだよ。」

妹紅が的確に突っ込んだ。

「邪魔する気はなかったんだがなあ。」

さすがに反省はしている様子で、慧音の方を見た。慧音の仕事ぶりをしばらく見たKは、こんな事をつぶやいた。

「で、こうして見るとみんな素直に授業受けてるよなあ。まあ子供は素直が一番だ。やっぱり慧音は先生が一番似合ってる。」

「そうだな。」

妹紅もKの意見に賛同した。

そんな事を言っていると、授業が終えた様子のチャイムが教室に鳴り響いた。

「と言ってる間に、授業が終わったみたいだぜ。」

とわかりきった事を言っていると、慧音がK達の方に駆け寄ってきて

た。

「Kに妹紅、今日は一体何の風の吹き回しだ？」

「別に。たまにはこういうのも悪くないって思ったただけだ。」

「突然来るのはやめてほしいものだ・・・」

「悪い悪い。お詫びといつちやなんだが、これから生徒みんなで俺の店に来ないか？お代はただにしておくぜ？」

「これからか？」

「ああ、ちょうど昼飯時だしな。おーい、がきんちよ共はどうだ？俺の店に来ないか？」

勉強道具を片付けている生徒達に、Kが呼びかけた。

「行きたい！！」

と生徒一同が、Kの呼びかけに全員が元気よく返事をした。

「みんな素直でいいねえ。で、慧音はどうする？」

「・・・教え子が行くなら、私もいいか。」

「よっし、そんじゃ、俺についてきな！！」

と言うと、Kは先導するように教室から出て行った。

「はい。」

と、生徒達もぞろぞろとKの後を追っかけていった。

「もう行っちゃったな・・・」

取り残された形の妹紅が、その様子を語った。

「まるで嵐のような男だ・・・始めて会った時とは大違いだ。」

と過去を思いふけるように言った。

「確かに十年前はああじゃなかった。まあ人は変わるもんだからね。」

「そうだな。」

「そんじゃ、あたしは先に行っておくから、慧音もまた後で。」

と慧音に一瞥すると、妹紅も教室を後にした。

「ああ。わかってるよ。」

普段は客などろくに来そうにないこの店も、今日は形だけ大盛況であつた。

店の中ではとても入りきれそうになかったので、みんな外でわいわいとKの作った麺を食していた。

「どつだがきんちよ共？俺の麺はうまいか？」

の一声に、子供たちは、

「おいしいよ！！」

「うん、うちのお母さんのより、ずっとおいしい！！」

と各々が返事をした。

「そうかそうか。それならおじさんも満足だ。」

子供たちの嬉しそうな様子を眺めていると、妹紅がようやく来たよつだ。

「みんなもう食べてるみたいだな。」

「お、お前さんもやつと来たか。慧音はまだか？」

「もう少ししたら来るよ。所であたしの分はあるのか？」

と、Kに催促をした。

「もちろんあるぜ。ほらよ。」

まってましたとばかりに、妹紅に手渡した。

「ありがとな。」

それを受け取り、箸を使ってそれを口にした。

「子供受けは今の所いいんだが、お前さんはどうだ？」

「……うまいよ。少なくとも今まで食べてきた麺の中で一番かも。」

と率直な感想を述べた。

「そうか、それならよかった。後は慧音だけか。」

安心した様子で待っていると、その慧音が少し急ぎ足で向かってきた。

「ふう、やっと着いた。」

「いらっしゃい、慧音。もうみんな結構食べちゃったぜ。まあお前さんの分はちゃんとあるよ。ほい。」

と、さっき妹紅に手渡したように、慧音にそれを手渡した。

「すまないな。」

それを受け取り、とりあえず店の前にあつた椅子に座った。

「今更だけだよ、俺の奴食べるのって結構久しぶりじゃないか？」

「そう言えばそうだな。」

「で、この前よりうまくなってるか？」

「・・・私は、もう少し麺が硬い方がいいな。」

と、いかにも慧音らしい感想を述べた。

「ちえ、さすがに厳しいねえ。慧音先生は。」

「お前に先生とは言われたくない。」

明らかにKを拒絶した様子で、慧音が答えた。

「きつついねえ。それじゃ、男が寄らないぜ？」

「そんな者、寄らなくてもいい。私には教え子達がいるんだから。」

「・・・まあそれはお前さんの自由だからな。でも、もう少しぐらい丸くなってもいいんじゃないか？あんまり棘生やしてばっかじゃ、子供達も怖がるだろ？」

「・・・」

K的を射た発言に、さすがの慧音も思わず黙った。

「よし、子供達は食い終わったみたいだから、いっちょおじさんが遊んでやるか！ー！」

気合を入れた調子で、子供たちに言い放った。

「え〜？おじさんで大丈夫？」

露骨に心配されるKだが、そんな事はまったく気にしてない様子だ。

「おじさんを舐めちゃ駄目だぜ？遊びでも全力がおじさんのモットーだからな！！」

「おいおい、子供相手に何えばってるんだよ？」

妹紅が冷静に言った。

「うるせえ！！あくまで遊びなんだからいいんだよ！！そんじゃ、みんなで鬼ごっここと行くか！！」

の一声で、自動的にKが鬼の鬼ごっこが始まったようである。

「・・・随分が体力が有り余ってるんだな、あいつ。」

そんな様子を見て、妹紅が言った。

しかし慧音は、Kではなく、楽しそうにしている子供たちの方を見て、こんな事をつぶやいた。

「見習いたいな・・・」

「へ？何言ってるんだ慧音？あいつのどこに、見習えるような所があるんだよ？」

「いや、子供達のおんなに自然な笑顔を・・・私はろくに見た事が

ないんだ・・・私は教師として間違った事はしてないと思う。だがそれが、子供達には面白くなかったのだろうか・・・」

そう、教師として続けた慧音は、子供たちの楽しそうな笑顔を、この目でろくに見たことがなかったのだ。

皮肉にも、慧音が教師としての職務を真つ当していた事は、子供たちにとって楽しい物ではなかったのだ。

それは当然の事なのだが、わかっているても慧音はその事に葛藤せざるを得なかった。

「慧音・・・」

妹紅が寂しげに言うと、遊んでいる真つ最中のKが、大きな声で慧音達を呼んできた。

「おいお前ら！！いつまで食べてる気だ！？早い事食べて子供達の相手してやれ！！」

とKは必死な呼びかけをしてきた

しかし、慧音はいまだに戸惑っている所である。そうすぐには動けそうになかった。

「だが・・・私は・・・」

悩む慧音に、妹紅が肩を軽く叩いて言ってきた。

「慧音、こついつ時こそ、子供達の笑顔をしっかりと見れるんじゃないか。ここは自分から行かないと駄目だろ？」

妹紅のその一言によって、慧音は決心を固めたようである。

「・・・それもそうだな。では、私も参加するか。」

と言って、椅子から立ち上がった。

「おつとみんな、ここで本物の鬼が来るぜ！！逃げないと食べられちゃうぜえー！！」

とやたらに子供たちを煽った。

それにたいして慧音が怒ろうとしたが、慧音はKを怒ろうとはしなかった。

「くらK・・・（あ、そうか、ここで怒るんじゃないんだ。ここは・・・）」

口をつぐみ、少し下を見ていると、慧音の近くにいた子供が慧音に話しかけてきた。

「どうしたの？慧音先生。」

子供のそんな問いに、慧音はさっきの箸を頭の帽子に差して、自分を鬼であるように仕立て上げた。

「・・・私は慧音先生じゃないぞ！！逃げない子は食べちゃう鬼だぞお！！待てえー！！」

と言いながら、逃げ回る子供たちを追いかけた。

「ほらな！！本性を現したぜ！！みんな逃げろー！！」

「わあー。」

と、Kも子供たちも楽しそうに慧音から逃げ回った。

「……ようやるよ、Kも慧音も。でも楽しそうだな。私も混ぜてみるか。」

と言うと、逃げ回っているKが、

「お、今度は妖怪炎ばあさんだ！！逃げないと真っ黒こげにされちゃうぜ……！」

と調子に乗った一言を言うと、妹紅は本当に炎を出してきた。

「Kえ……本気で真っ黒こげにしてやる……！」

と言うと、Kに向かって炎の弾幕を放った。子供たちには当たらないよう、全て誘導弾の弾幕である。

「ちよう、たんまたんま！！遊びで本気になるなって……！」

Kは飛び交う弾幕を、どうにかかわし続けた。

気がつけば、子供たちも慧音もそれを見る観客になっていた。

「すごい……あの火の玉、Kおじさんみーんな避けてる……！」

「ねえ慧音先生……僕らもあんな事出来るかな？」

無邪気に尋ねる子供に、慧音は

「そうだな・・・よい子にしてたらきつと・・・」

と普段は見せないような、柔らかな笑顔で答えた。

「慧音！！マジで助けてくれ！！俺さっきの疲れがちよつと・・・」

明らかに疲れた様子を見せるが、慧音は冷静に、

「大丈夫だ。お前ならいける。」

と言い切った。

「何根拠に言ってるんだこんちきしょおおお！！！！！！」

Kの店前 夕方

Kと妹紅の一方的な戦いが終わる頃には、日がすっかり暮れていた。

「あゝ楽しかった！！またね、Kおじさん！！」

自分の家に帰りながら、K達に手を振って言った。

「おう・・・遠慮せずまた来いよ・・・」

さっきの戦いのせいで、全身ぼろぼろになっていた。

「結局、夕方になってしまったな。」

慧音が、茜色の空を眺めていった。

「久々に熱くなったよ。やっぱり適度な運動はいいもんだ。」

と語る妹紅に、Kが当然突っかかってきた。

「てめえ！！遊びであそこまでやるか普通！？」

「遊びも本気がモットー・・・だろ？」

「くの尼ぁ・・・」

一本取られ、立つ瀬のなくなったK。

そんなKに、慧音が率直な一言を言ってきた。

「今日はありがとうなK。お陰で、これから教え子達にもっと接する事が出来るよ。」

「そうか。そりゃいい。」

「まさかお前に、こんな事を教わるなんて思わなかった。」

「教えた覚えはねえけど、手助けになったのならよかつたぜ。」

「それじゃ、私はそろそろ帰るとするよ。」

「あたしもな。」

「そうか。そんじゃ気をつけて帰れよ。最近妙な噂が立ってるからな。」

「原因は、お前じゃないだろうな？」

「そんな訳ねえだろ!!このすつとこどつこい!!」

「それなら、少し気をつけておくとするよ。それじゃあな。」

二人ともKに軽く一瞥し、その場を後にした。

K以外は誰もいなくなった所で、Kは朝やったように体を伸ばした。

「おう。じゃあな〜・・・ふう、久々に疲れたぜ。やっぱ年だ、思ったように体が動かん。昔はもうちょい無理出来たんだがねえ。若いってやっぱりいいもんだ・・・まあ悔やんでも仕方ねえ。町の子とかよくわかったし、慧音と妹紅にも会えた。後は・・・これを片付けるだけか。」

と言うと、Kは店前を掃除し始めたのであったとさ。

Kの一日 FIN

(後書き)

後書き

こんぱろ(#^|^#)お馴染みの澄田ですよ(^|^)

どうですかみなさん?三人一緒にを見ていてくれるなら、この外
伝もわかってくれると思います(^|^)

Kはまあ基本ノリで動くタイプだって事はよくわかったと思います
(>|<)/

とりあえず、慧音は苦労症キャラだとわしは思っんですよね~)
)

まあそれは人それぞれって事で。(^^)

原作も鋭意執筆中ですので、是非とも応援よろしくお願いします)
>|<)/

スペシャルサンクス

K様

上白沢 慧音様

藤原 妹紅様

人里の子供達

では、このような駄文をお読みいただき、まっことありがとうございます
います m (| (m

by 澄田康美

PS、楽しければそれでいい。面白かったらもっとうい。小説書く
って、そういう物だと思いませんか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9776n/>

三人一緒に幻想入り外伝 Kの一日

2010年10月9日16時12分発行